

「黙れ、沈まれ」

マルコの福音書 4:35～41

はじめに

今日の箇所はイエシュアが湖の上で荒れ狂う風と波を叱りつけ、これを沈められるという、まさに神業と呼ぶべき衝撃的な出来事が記されています。それだけでもイエシュアが力ある神であるというメッセージとなり得ますが、イエシュアの言動、行動にはすべて意味があります。衝撃的な出来事についてはもちろんですが、一見何の変哲もない情景描写のような記述の中にも、聖書の原語であるヘブル語の、その最初の言及をもって見るならば、そこには秘められた「神の国の奥義」の存在が確認できます。イエシュアは多くのたとえ話をもって「神の国」を表したとされていますが、実はこの視点で捉えるならば、イエシュアについてのすべての出来事、出会う人、記された場所の様子、その名前や数に至るまで、すべてが「神の国」についての神のご計画を表したものであると考えることができるのです。イエシュアは無作為にその神の力を振るい、人々に見せつけてご自分が神であることを表そうとされたわけではありません。すべては「神の国」についてのご計画を指し示す行為であったのです。その事実が目が開かれる時、神がどれほどの情熱と願いをもって、ただひたすらにこの「神の国」を求め、その完成に向かって突き進んでおられるのかということに気づかされます。そしてこれに耳を傾け、信じて受け取っていくならば、今の世、揺れ動く世界の現状や、サタンによる偽りの情報に惑わされない考え方、生き方へと導かれるのです。ですから今日も私たちの思いや願いのためではなく、神の願い、神のご計画に、「神の国」に目を向けるために、「神の国」を求めて聖書を学んでまいりましょう。

1. 向こう岸へ渡る

【新改訳 2017】 マルコの福音書

4:35 さてその日、夕方になって、イエスは弟子たちに「向こう岸へ渡ろう」と言われた。

まず時は「夕方」であったことが記されていますが、これをヘブル語でエレヴ(ערב)と言います。創世記 1:5 に聖書で最初に記されたこの言葉は本来、神の天地創造の御業の第一日に、神が光を呼び出され、これを闇と区別されるという御業、出来事において使われました。

【新改訳 2017】 創世記

1:1 はじめに神が天と地を創造された。

1:3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。

1:4 神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。

1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

神は「光と闇」をただ分けられたのではなく、「光を良しと見られ」とあるように、「光」だけをお選びになり、これのみを「良しと」ご自分のものとされたのです。神がお選びになったものをご自分のもの

として選び出され、そうでないものと完全に区別されたという、その御業、出来事の後に「**夕があり、朝があった。**」と訳された聖書で最初のエレヴが記されていることから、この言葉は本来、神の選び分け、すなわち裁きが必ず起こり、そして完了、完成することを指し示したものであると考えられます。

そしてイエシュアは「**向こう岸へ渡ろう**」と言われました。状況としては並行記事のマタイの福音書 8 章の内容から、この時イエシュアと弟子たちはガリラヤ湖畔の町カペナウムにあり、そこから舟で対岸のゲラサ人の地に行こうとしているという場面ですが、そのような説明はこのマルコの福音書にはありません。ただ時は「**夕方**」であったこと、そして「**向こう岸へ渡ろう**」と言われたイエシュアの言葉だけが記されています。ヘブル語で「**向こう岸**」はエーヴェル(עֵבֶר)と言い、その語源が「**渡る**」という意味のアーヴァル(אָוַר)で、なんとどちらも同じ綴りです。そしてこの言葉が聖書で最初に使われたのは創世記 8:1 です。



【新改訳 2017】 創世記

8:1 神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた。神は地の上に風を**吹き渡らせた**。すると水は引き始めた。

これは「ノアの箱舟」の舞台となった、かつて全世界を水没させた大洪水を記した、その終盤の一場面ですが、ここで「神は…風を**吹き渡らせた**」と訳されている箇所には聖書で最初のアーヴァルが使われています。神が風をアーヴァル「**吹き渡らせた**」のは、「神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた」からであることがわかります。そしてこれらのものたちを再び地の上に住まわせるためであったとも考えられます。ですからアーヴァルには本来、**神がお選びになったものに地を与える、地に住まわせる**という意味があると考えられます。ですから「**向こう岸** (エーヴェル) **へ渡ろう** (アーヴァル)」というイエシュアの言葉には、この本来の意味が二度繰り返されて、強調して表されていると考えられます。ちなみにこの言葉はイスラエルの民の別称、ヘブル人(עִבְרִי)の語源でもあります。彼らが「神の国」の民として選ばれていることが、この名からも理解することができるのです。このように「**その日、夕方になって、イエスは弟子たちに「向こう岸へ渡ろう」と言われた。**」という記述には、**神の選びの民が滅びを免れ、地を受け継ぐことが神の裁きの御業の完了、すなわち「神の国」の完成である**ということが表されていると考えられます。

2. 三つの出来事

【新改訳 2017】 マルコの福音書

4:36 そこで弟子たちは群衆を後に残して、イエスを舟に乗せたままお連れした。ほかの舟も一緒に行った。

この節には三つの出来事が記されています。まず一つ目は「弟子たちは群衆を後に残し」という出来事です。状況としてはイエシュアと弟子たちが群衆を置き去りにしていくように見える場面ですが、イエシュアの教えを聞くために集まって来た非常に多くの群衆（マルコ 4:1）に対する態度としては少々不可解です。これをヘブル語の視点で解釈すると、ここで「残して」と訳されているヘブル語はヌーアハ(נִוּוּ)と言い、本来は神が人をエデンの園に「置く」という意味で使われた言葉です。

【新改訳 2017】創世記

2:15 神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

また「群衆」を意味するハーモン(חַמּוֹן)は本来、アブラハムによって祝福される「多くの国民」（創世記 17:4）を意味する言葉であることから、この「群衆を後に残し」という行為は、イエシュアのみもとに集められた「群衆」はみな、回復された「エデンの園」である「神の国」に「置かれる」というメッセージを表した「型」、たとえとしての行為であったと考えることができます。

次に二つ目の出来事「イエスを舟に乗せたままお連れした」という行為について。一見何の変哲もないただの状況説明に見えますが、ヘブル的視点では「舟」オニツヤー(אֲוִיָּא)は創世記 49:13 にその最初の言及があり、「ゼブルン」という人物が住む場所を指し示したものであると考えられます。

【新改訳 2017】創世記

49:13 ゼブルンは海辺に、船の着く岸辺に住む。その境はシドンにまで至る。

この「ゼブルン」とはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルの 12 人の息子の一人ですが、彼の名には「尊ぶ、高める、～と（ともに）住む」という意味があるのです（創世記 30:20）。またオニツヤーは二つの言葉が組み合わさったものと見ることができ、それは「私」という意味のアニー(אֲנִי)と、「主」と訳される神の固有名ヤー(יְהוָה)です。つまり「舟」オニツヤーには「わたしは主である」という意味があり、「主が尊ばれ、主とともに住む」というメッセージが込められていると考えることができるのです。また「お連れした」と訳されるラーカハ(לָקַח)は、先ほどのヌーアハ「残して」と同じ創世記 2:15 に最初の言及があり、本来「エデンの園に連れて来られる」という出来事を指し示した言葉であると考えられ、つまり「イエスを舟に乗せたままお連れした」という行為には、「主とともに神の国に入り、ともに住む」というようなメッセージが込められていると考えることができます。

そして三つ目は「ほかの舟も一緒に行った」という出来事です。「ほかの」と訳されているヘブル語のアヘール(אֲהָרַל)は本来、最初の人アダムの息子、「セツ」を指し示した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

4:25 アダムは再び妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけた。カインがアベルを殺したので、彼女は「神が、アベルの代わりに別の子孫を私に授けてくださいました」と言った。

「アベル」は神に目を留められ受け入れられた人でした（創世記 4:4）。しかしそれを妬んだ兄の「カイン」によって殺されてしまったために「神が、アベルの代わりに別の子孫を私に授けてくださいました」とあり、ここに聖書で最初のアヘールがあります。このように、「ほかの」と訳されたアヘールには神に目を留められた人の死によって、神が備えられた子孫というような存在が指し示されていると考えられ、それはすなわちイエシュアの十字架の死によって、その罪を赦され神の子どもとされる者たちのことであると考えられ、それが先の二つの出来事に指し示された、アブラハム（の子孫）によって祝福され、主とともに住む「神の国」の民であるというメッセージがこれら三つの出来事によって表されていると考えられます。このように、特に気に留める必要のない、単なる状況説明と思われるような記述にも、「神の国の奥義」が秘められているのです。

3. 激しい突風

【新改訳 2017】 マルコの福音書

4:37 すると、激しい突風が起こって波が舟の中にまで入り、舟は水でいっぱいになった。

さて、状況は突如一変して危機的なものとなっています。「激しい突風が起こって」イエシュアと弟子たちの舟は波をかぶり、沈没寸前にまで追い込まれます。実際にガリラヤ湖は海拔マイナス 213m、東西を高地に挟まれた、まるで谷底のような場所に位置した湖ですので、しばしば強烈な風が吹きつけてくるそうです。しかしここに記された出来事は偶然のものではなく、神のご計画を表すために必然的に起こったものです。

「(激しい突風が) 起こって」という箇所に使われているクーム(קום)は本来、創世記 4:8 でアダムの息子カインが、弟のアベルを殺すために「襲いかかった」という行為を指し示した言葉です。また「突風」はセアーラー(הַקָּוֶץ)と言い、これは本来、Ⅱ列王記 2:1 で預言者エリヤを天に引き上げた「竜巻」を指し示す言葉です。ですから「激しい突風が起こって」という状況には「殺され、天に引き上げられる」という出来事が指し示されていると考えられ、これはイエシュアの十字架の死と、そして復活、昇天の出来事が指し示されたものであると考えられます。

また「波が舟の中にまで入り」ともありますが、ここには「波、かたまり、山積みされたもの」という意味のガル(גל)と「あらう、押し流す、あふれる」という意味のシャータフ(שָׁטַף)が使われています。「波」という意味で使われているガルですが、創世記 31:46 に最初の言及があり、本来は石を積み上げて造った山「石塚」を意味した言葉です。

【新改訳 2017】 創世記

31:44 さあ今、私とあなたは契約を結び、それを私とあなたとの間の証拠としよう。」

31:46 ヤコブは自分の一族に言った。「石を集めなさい。」そこで彼らは石を取り、石塚を作った。彼らは石塚のそばで食事をした。

31:51 また、ラバンはヤコブに言った。「見なさい、この石塚を。そして見なさい、あなたと私の間に私が立てた、この石の柱を。」

31:52 この石塚が証拠であり、この石の柱が証拠である。私は、この石塚を越えてあなたのところに行くことはない。あなたも、敵意をもって、この石塚やこの石の柱を越えて私のところに来てはならない。

これはヤコブすなわちイスラエルと彼の義父のラバンが和解の契約を結んだ場面です。彼らはガル「石塚」を和解のしるしとしました。イエシュアの十字架の死という贖いによって、イスラエルのすべての罪が赦され、この民が父なる神と和解すること、それが「波」と訳されたガルに表されていると考えられます。

また「あらう、押し流す、あふれる」という意味のシャータフはレビ記 6:28 の「最も聖なるもの」の規定の中にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】レビ記

6:25 「アロンとその子らに告げよ。罪のきよめのささげ物についてのおしえは次のとおりである。罪のきよめのささげ物は、全焼のささげ物が屠られる場所、【主】の前で屠られる。これは最も聖なるものである。

6:28 ささげ物を煮た土の器は砕かなければならない。青銅の器で煮たのであれば、その器は磨き、水ですすぐ。

神の御前に「最も聖なるもの」をささげるために「砕か」れ「磨き」あげられ、そして「水ですすぐ」、ここに聖書で最初のシャータフがあります。ですから「波が舟の中にまで入り」という出来事には、イスラエルの民が神と和解し、きよめられて、最も聖なるものとなるという神のご計画が表されていると考えられます。

また「舟は水でいっぱいになった」ともありますが、ここには「満ちる、満たす」という意味のマーラー(מָלַא)が使われており、この言葉は本来、創世記 1:22 にある「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。」と仰せられた、神の祝福を指し示す言葉です。ですから「激しい突風が起こって波が舟の中にまで入り、舟は水でいっぱいになった。」という出来事には、イエシュアの死と復活、それによるイスラエルの罪の贖いと神との和解、そして祝福された民としてのイスラエルが表されていると考えられます。

4. イエシュアは眠っておられた

【新改訳 2017】マルコの福音書

4:38 ところがイエスは、船尾で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生。私たちが死んでも、かまわないのですか」と言った。

4:39 イエスは起き上がって風を叱りつけ、湖に「黙れ、静まれ」と言われた。すると風はやみ、すっかり凪になった。

危機的状況の中、イエシュアは「船尾で枕をして眠っておられた」とあります。「眠(る)」という意味のヤーシェーン(יָשָׁן)は本来、創世記 2:21 で神が最初の人アダムのあばら骨から彼の妻となる女エバを造り出すために、彼を深い眠りに落とした出来事を指し示す言葉です。

【新改訳 2017】創世記

2:21 神である【主】は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。

「人は眠った」と訳されている聖書で最初のヤーシェーンは、ただの睡眠ではなく、わき腹を切り裂かれ、肋骨を抜き取られても何も感じないという、ほとんど死んだような状態を意味します。ですからイエシュアの「眠っておられた」姿には、イエシュアの死、十字架の出来事が表されていたと考えられます。しかしイエシュアは「船尾で枕をして」おられました。「船尾」には「～の後に」という意味のアハル(אַחַר)が使われておりこれは本来、時間的、時代的な後、後の時代を指し示す言葉で、その最初の言及は創世記 9:28 のノアの大洪水の後、すなわち滅びが終わった後を指し示す言葉であると考えられます。また「枕をして」という記述は意識で、正確には「覆い(外套などの上着)の上で」となっています。つまり上着を脱ぎそれを布団のように敷いて寝ておられたということですが、ここで使われている「覆う」という意味のカーサー(קָסָה)は本来、創世記 7:19 でノアの大洪水の水が高い山々を覆ったことを指し示した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

7:19 水は地の上にありますすみなぎり、天の下にある高い山々もすべておおわれた。

このようにカーサーは地上のどんな高い山をも覆うこと、すなわち最も高い存在を指し示し、さらにその上に「覆いの上」におられたイエシュアの姿に、地上で最も高い位「王の王、主の主、いと高き神の御子」としての存在が表されていると考えられます。つまり「イエスは、船尾で枕をして眠っておられた」という様子には、**死から復活されたイエシュアは、後の世で、地上で王の王、主の主、いと高き神の御子となられる**ということが表されていると考えられます。

4. 起こす

一方イエシュアの弟子たちはイエシュアを「**起こして…**」とあります。そしてそれに応えてイエシュアは「**起き上がって**」とありますが、この二箇所にはどちらもウール(וָעָר)という言葉が使われており、その最初の言及は申命記 32:11 です。

【新改訳 2017】申命記

32:8 いと高き方が、国々に相続地を持たせ、人の子らを割り振られたとき、イスラエルの子らの数にしたがって、もろもろの民の境を決められた。

32:9 【主】は、測り縄で割り当て地を定められた。ご自分の民、ヤコブへのゆずりの地を。

32:10 主は荒野の地で、荒涼とした荒れ地で彼を見つけ、これを抱き、世話をし、ご自分の瞳のように守られた。

32:11 鷺が巢のひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞い、翼を広げてこれを取り、羽に乗せて行くように。

これはモーセがイスラエルの民に歌って聞かせた預言の言葉の一節です。「鷺が巢のひなを呼び覚まし」という箇所には聖書で最初のウールがあります。そしてそれは神がイスラエルの民を「ご自分の民」とし、ご自身が定めた「ヤコブへのゆずりの地」に連れて行くことを指し示しています。そのような意味、神のご計画がイエシュアによって成就することが、弟子たちがイエシュアを「起こして…」またイエシュアが「起き上がって」と繰り返すように記され、強調して表されていると考えられます。

5. 黙れ、沈まれ

イエシュアは「風を叱りつけ」ました。ここに「叱る」という意味のガーアル(רָעַץ)が使われています。この最初の言及は創世記 37:10 です。

【新改訳 2017】創世記

37:9 再びヨセフは別の夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また夢を見ました。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいました」と言った。

37:10 ヨセフが父や兄たちに話すと、父は彼を叱って言った。「いったい何なのだ、おまえの見た夢は。私や、おまえの母さん、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むというのか。」

37:11 兄たちは彼をねたんだが、父はこのことを心にとどめていた。

これはヤコブすなわちイスラエルが、息子のヨセフをガーアル「叱った」出来事です。そしてそれはヨセフが見た夢に対してでした。その夢は神がこれからなそうとしておられること、神のご計画を表していましたが、ヤコブがヨセフを叱り、それを語ることを禁じました。ですからガーアルとは本来、**神のご計画を隠す**というような意味があると考えられます。またイエシュアは「**黙れ、静まれ**」とも言われました。ここにはハス(חָס)という言葉が使われていますが、この本来の意味もガーアルのそれと同様のものです。

【新改訳 2017】士師記

3:19 「王様、私はあなたに**秘密のお知らせ**があります。」すると王は「**今は、言うな**」と言ったので、そばに立っていた者たちはみな、彼のところから出て行った。

これはイスラエルの士師の一人であるエフデガが、当時イスラエルを支配していたモアブの王エグロンを暗殺するという出来事の一場面ですが、「**今は、言うな**」という箇所には聖書で最初のハスがあります。そしてそれは「**秘密のお知らせ**」を誰にも聞かれないようにするというものでした。ですからイエシュア

が「風を叱りつけ、湖に「黙れ、静まれ」と言われた」という行為には、神はそのご計画を「神の国の奥義」として秘める、隠すということが表されていると考えられます。

このように、神はそのご計画を、たとえ話や出来事の中に隠しておられます。それはご自分がお選びになった者だけに「神の国」を表し、迎え入れるという、選びの神、裁きの神としてのご性質のゆえです。神がお選びにならない者には、神は決してご自身を明らかにされません。その事実が以下の出来事に表されています。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

4:40 イエスは彼らに言われた。「どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか。」

4:41 彼らは非常に恐れて、互いに言った。「風や湖までが言うことを聞くとは、いったいこの方はどなたなのだろうか。」

彼らは神を恐れているわけではありません。「いったいこの方はどなたなのだろうか」と、神がわからなくて、そのご計画が理解できなくて、信じて受け入れることができなくて、「信仰がない」ために恐れているのです。ですから隠された神のご計画を聞き、それを信じて受け入れることができる人は幸いです。これからもますますこの「神の国の奥義」を求めてまいりましょう。